

村野藤吾記念会

Togo Murano Committee

第18回村野藤吾賞

設計者 鈴木了二

作品 金刀比羅宮

象頭山（琴平山）の急斜面の中腹、海拔238メートルに水平面を切り開いたのは、戦国の時代であったと聞く。以後、時代とともにそれを拡張し続けてきた。金刀比羅宮にとり最も重要な33年毎のみまつり「大遷座祭」が昨年秋に斎行された。

そのための神殿ゾーンの拡張と改造計画の建築家として鈴木了二氏が指名を受けた。

神殿ゾーンは、深い森に包まれた急峻な地形をそのままにして、絶妙に組みあげられた786段の石段を登り詰めてようやく到達できるところにある。そこに、江戸期に建造された御本宮、三穂津姫社、絵馬堂など重要な遺構が建ち並び、背後に蒼々たる自然の黛を重ねる山々と瀬戸内海にまでの視界を開く神域となっている。

参拝者が永く親しんだ景観を尊重し、山も樹木もそのまま残すことを条件として、神殿ゾーンの設計を委嘱された。

既設水平盤上の神殿域南部を大きく拡張して、御本宮と三穂津姫社前の神殿域を東に迫り出して上げ、段差も勾配もない南北全長200メートルの完全な水平域としている。拡張面は鉄板の人工盤、それを支持するものは自由に配された全溶接壁柱である。

この大水平面は、その上下の性格の異なる域を厳しく分節する結界となっている。新しく加設された人工盤を、鋭く直行する数条の亀裂が走る。その亀裂は、盤上数ミリメートル浮上する厚板ガラスであり、そこは光だけが上下の域を透り抜けることが許される。

人工地盤の上部には、日本古来の純木造の屋根が浮かぶ。人工盤を支える下部の構造とは無関係に建つ盤上の鉄骨柱は、日本建築のモジュールとスケールに従って清楚に組み立てられて、しかも、それが支える屋根と不連続に連結し、互いに優しく自律させる。

切り立つ自然の斜面に建つ擁壁として、320×320mmの石柱を並べ建てている。それは水平地盤とは接することなく自立する完全な垂直線の量感となり、786段を上昇しつづけてきたクライマックスを純化するのである。

水平地盤の下の斎館は、鉄の壁柱と鉄の天盤が厳しく協演する空間である。その厳しさに北西の切り立つ山の急斜面が迫る。そこに大きな御影石の手水を見た。上面は浅く彫り込まれ、そこに数条の水の糸が垂れる。その透明に光る完全な垂直線は、落下の加速とともに細くなり、石の上の水の張力面を柔かくふるわせていた。鋭い透明な物質試行を体験した最後に、その清らかな水平と垂直の自律関係に出会い、静かな感銘を受けた。

外は春近い冬の日が暮れかかっていた。大地も、水平の地盤も、神域の宮々も、森も、薄暮の光を残す空の下で一つの黒い輪郭となり、その大地のはるかな深い地点からの、“ゴォー”という重い声のような余韻が残る。

村野藤吾記念会 代表 池原義郎